

『就実論叢』第52号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2023年2月28日 発行

保育者養成課程における
「子育て支援力」育成への取り組み
－文献調査より－

**Efforts to develop “child-rearing support skills” in the nursery teacher training
course/ From a literature search**

三 好 年 江

保育者養成課程における 「子育て支援力」育成への取り組み

－文献調査より－

Efforts to develop “child-rearing support skills” in the nursery teacher training course : From a literature search

三好年江 (幼児教育学科)

MIYOSHI Toshie

キーワード：保育者養成課程・子育て支援力・新カリキュラム・評価

1. はじめに

保育士の業務については、2003年の児童福祉法改訂で「専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する指導を行う」（第18条第4条）という内容が示され、子どもの保育に加えて、その保護者に対する子育て支援を行うことが明確にされた。2008年に告示化された『保育所保育指針』¹⁾（以下、『指針』）では、それまで、「保育所における子育て支援及び職員の研修」とまとめて記載されていた内容が「保護者に対する支援」と新たな章立てがなされ、その中に、地域の子育て支援について示されることとなり、その重要性が強調されることとなった。2017年の『指針』²⁾改定では「保護者支援」が「子育て支援」へと名称変更され、支援を行う対象となる家庭や支援の基本的な考え方、支援にあたっての姿勢や態度、配慮すべき内容等がさらに詳細に打ち出された。このように、保育士はその専門性を十分に発揮しながら「子どもを保育すること」「在園児の保護者を支援すること」に加えて、「地域の子育て家庭への支援」を行うこととなったのである。

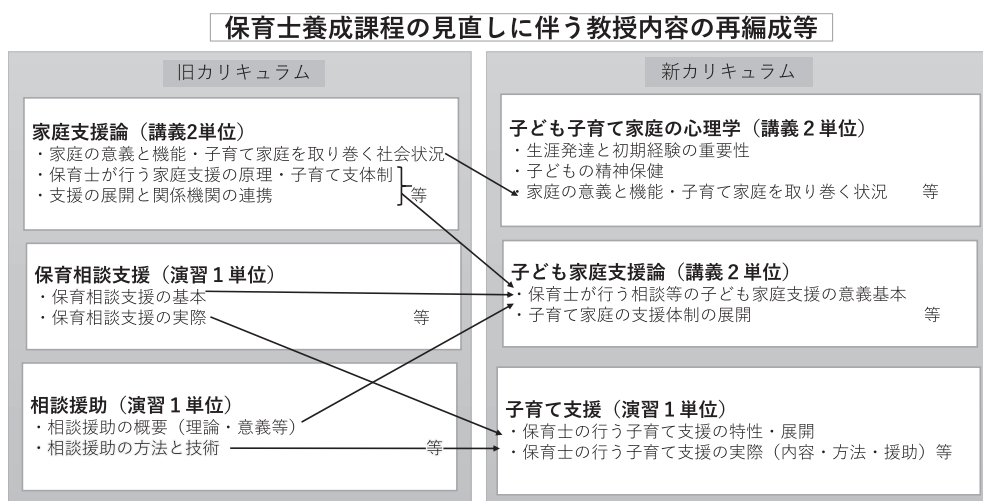
次に、保育士養成課程に目を向けてみると、2002年度より、「家庭援助論」が必須科目として創設され、子育て支援について専門に学ぶようになった。その後、2013年度には、「家族援助論」が「家庭支援論」へと名称変更され、「社会福祉援助技術論」が「相談援助」「保育相談支援」と改変されていった。さらに、2019年度の保育士養成カリキュラムの改正（以下、「新カリキュラム」）では、「児童家庭福祉」が「子ども家庭福祉」へと教科名の変更が行われ、「相談援助」「保育相談支援」「家庭支援論」の3科目が、「子ども家庭支援論」「子育て支援」「子ども家庭支援の心理学」に整理されるなど、子育て支援を学ぶ教科の再編等が行われている。養成校においては、保育士の専門性や役割を十分認識した上で、教育効果のある授業内容の検討が求められるところである。

そこで、本研究では、新カリキュラム以降の2019年、2020年、2021年度の保育士（者）養

成校における子育て支援力育成の取り組み内容について調査し、筆者が担当する授業「子育て支援」や本学科における子育て支援力育成の取り組みについての一助を得ることとする。

2. 新カリキュラム（子育て支援関連科目）について

2015年6月より、「子どもや家庭を取り巻く様々な環境の変化等に伴う子どもの育ちの課題や保護者支援の必要性など、保育所や保育士に求められる役割や機能が深化・拡大しており、保育の質を担う保育士の役割は重要となっている」ことを受け、「保育士養成課程等検討会」³⁾が立ち上がり、「保育士養成課程等の見直し」について検討が行われた。約2年半、計9回の検討会等を経て、2019年度より新カリキュラムが施行されることとなった。「具体的な見直しの方向性」として、次に挙げる6つの重点項目が示された。①乳児保育の充実、②幼児教育を行う施設としての保育の実践、③「養護」の視点を踏まえた実践力の向上、④子どもの育ちや家庭への支援の充実、⑤社会的養護や障害児保育の充実、⑥保育者としての資質・専門性の向上である。そのうち、④については、子育て支援に関して総合的な力を養うことを目的に、教科目「家庭支援論（講義2単位）」「相談援助（演習1単位）」「保育相談援助」（演習1単位）」を「子ども家庭支援論（講義2単位）」「子育て支援（演習1単位）」「子ども家庭支援の心理学（講義2単位）」に再編・整理し、「児童家庭福祉（講義2単位）」が「子ども家庭福祉（講義2単位）」へと教科目名の変更が行われた。この見直しにより、保育者の専門性を活かした子ども家庭支援が整理され、子育て支援を重点的かつ総合的に学ぶこととなった。一方で、この再編・整理等により、講義科目が2単位増えて、演習科目が1単位減ることとなった（図1）。



※上記の図は、既存の図²⁾から筆者が「子育て支援の関連科目」のみ取り出し、一部修正を加えている。

図1. 子育て支援に関するカリキュラムの新旧対照表

3. 結果

新カリキュラム以降の2019年、2020年、2021年度の保育士（者）養成校における子育て支援力育成の取り組み内容について調査した。調査の対象は、論文検索サイト ciiniResearchより、保育士（者）養成・子育て支援をキーワードに検索された文献で、授業の位置づけがあり、学生の教育や学びを意識した取り組みのある6件とした。文献調査の結果、①リアリティを意識した演習内容の工夫②授業と授業外活動を含めた総合的な取り組み③養成期間を見据えた体系的学習の仕組みに整理された（表1）。

1) リアリティを意識した演習の工夫

中山ら⁴⁾は、「子育て」独自のリアリティの存在に、ある程度の理解を備えた保育者を養成する必要があるという問題意識を持ち、実践経験から学習を導く理論である「リアリスティック・アプローチ」を採用し授業計画を行っている。全11回の授業のうち、第3回、第6回、第10回の授業で学生が実際に「子育てカフェ」を運営し、それぞれの回に事前指導、事後指導を設けている。途中、学生の実践的な学びを補強するために特別講義を実施している。実践と事後指導(リフレクション)を期間内に3フェーズ繰り返すことによって、各フェーズの経験の蓄積とその省察から学びを得られるように工夫している。その結果、初めて聞く子育ての話に驚き、想像とは異なる現実を知るなどリアリティショックを受けながらも親理解につながるリアリティのある学びがあった。また、母親の気持ちを知る手がかりを得ている。

江莉川⁵⁾は、弘前地区の保護者子育てアンケートから見えてきた「子育ての悩み」の対応策を題材としたグループワークを行っている。テーマに沿って調べたことをディスカッションした上で結論や成果を発表するものである。その結果、受講前後の心境に変化があり、限られた講義回数でも保護者支援の理解と技術面の向上等、実践力を養うことができたこと述べている。事例を通して他者の気持ちを知り、理解し寄り添うことの重要性を実感するとともに、グループの取り組みを認められることにより自信を持つきっかけとなり、学生自身が自己肯定感を高めることにつながったと報告している。このことから、グループでの話し合いが授業の方法として有効であることがわかったと述べている。

2) 授業と授業外活動を含めた全体的な取り組み

久保田ら⁶⁾は、平成29年度から大学における子育て支援活動「わくわくランド」を開始している。教員の専門性を活かしたものと、学生主導のものとを組み合わせた活動である。これまでの学科の伝統的な企画と新しい企画を融合させて地域行事として開始した。また、授業「保育・教職実践演習」を準備の時間に使用するなど授業と子育て支援の活動を関連させながら実施した。取り組みはその後、新企画を立ち上げたり、自治体や市内のこども園、子育て施設等とも連携したり、出向いていくアウトリーチなど多様な形で活動を展開している。ここでは、各活動に参画したボランティア学生の教育効果を検証するために子育て支援力について評価測定（社会的スキル・子育て支援力・保育観）している。結果、活動内容に

よって、上下の変動が見られたと報告している。「わくわくランド」の取り組みを正規の授業に加え、実践的な学びを通して子育て支援力を振り返りさらに高めていけるよう、活動内容を一層精査して行く必要があると報告している。

瀬々倉⁷⁾は、2016年度より、子育て支援ルームを開設し、学科全体で取り組んだ内容を報告している。本研究は、主に2018年の取り組み内容で、ひっぱりんシリーズの企画・実施・記録の映像化、およびその研究を行っている。通常のゼミ授業に加えて、毎週1-2コマ分を使用して、企画や準備、練習を行った。学生と保育者および、心理職という異なる立場の協働によって行う親子支援である。1回生、2回生の関わりもあるが、原則として3回生は子どもと1対1で密に関わり、4回生は、子どもと3回生の活動と、保護者対象のヨーガ・インストラクターや心理職によるプログラムを映像記録化して、今後の活動の参考や卒業研究に関わるデータとしている。ひっぱりんシリーズ最終回に行う保護者支援プログラム「おしゃべりサロン」においては、保護者が日々の子育てにまつわる自身の思いを内省しつつ、他の参加者との交流を深めることができるように心理職がファシリテーターを務めて、その話題の中にも4回生の卒業研究に関するテーマを加えて参加者に協力依頼している。また、学外施設への訪問や講話を聞くなど多様な活動を取り入れた。

その結果、参加学生は、①満足度が高く②親子と密に交流することの難しさや新鮮さを感じたと同時に難しさを再認識③連続性の中で関わることで親子や学生自身の変化に気づく④親子支援活動を改めて客観視するために、活動を映像化して行った質的研究に意義を感じている⑤子ども・子育て支援の多様なあり方を知った上で、自分たちが実施可能な支援について考えることができたなど、通常の実習とは異なる経験をしており、より豊かな子ども理解と保護者理解、さらには多様な親子支援のあり方への学びに貢献したとある。

3) 養成期間を見据えた体系的な学習の仕組み

菅野ら⁸⁾は、子育て支援の現場で実習を行う科目「子育て支援演習A」(2017年度に開講)によって、学生が何をどう学び、深めていくかを明らかにする等を目的に研究を行った。4年間の養成期間で、2年次の授業「子育て支援論」では、講義に加えて、大学内子育て支援施設にて研修を行うようになっている。3年次には、本研究対象科目である「子育て支援演習A」を履修する。なお「子育て支援演習A」の履修者は「子育て支援演習B」の履修が可能であり、「子育て支援演習B」は地域の保健センターにおける乳幼児健康診査や発達相談等の現場で研修を行うようになっている。このように、2~4年次にかけて多面的に子育て支援について学ぶことができるよう授業が計画されている。研修先の選択は任意で各自8回(1回あたり2~3時間)の研修を行い、各回終了後に定められた書式の報告書を提出する。第9回の中間報告ではこれまでの研修の経験をディスカッションし、全て研修が終了すると13~15回の授業でそれぞれの実践発表を行っている。学生は、保護者とのコミュニケーションを経験する貴重な場であると認識しているとともに、おむつ交換や授乳、寝かしつけなどを保育者の指導や学生同士の話し合いにより経験できることに価値を見出していた。子育て

支援の現場は、保護者や子どもとの関わりは一期一会の場合もあり、より高いコミュニケーションスキルや保育技術が必要であると考えられると述べている。研修では、現場の保育者から丁寧な保育技能の指導を受けたり、保育者と保護者の会話を垣間見たりすることができ、さらに自ら試行錯誤しながら実践できることなどを評価していた。また、子育て支援を学ぶだけに留まらず、深い学びがある学生の学びのサイクルを説明し「保育者としての基本的な能力の向上に寄与するものと考えている」と報告した。

中島ら⁹⁾は、市内等の子育て支援の実態を踏まえて授業内容を工夫している。授業「保育実践演習」では、保育を取り巻く現代的課題について学び、保育者として、子育て家庭への支援で何ができるか「子育てサロン」を企画した。個々でプランを立て、グループでプランを話し合い、内容の具体化を図っていった。サロンの企画と広報活動のためのチラシ作りにも取り組んだ。また、「子育て家庭論（旧カリキュラム）」では母親の心理等を理解するためにドキュメンタリーを視聴し、将来就職する地域の子育て支援施策、子育て支援の取り組み等の調べ学習、4年次の「保育実習指導」では、保育・子育て支援センターを見学先として調べ学習を行っている。結果、このような体系的な授業の取り組みにより、自分が子育て支援を行う当事者になるという意識が醸成されるとともに、具体的な子育て支援を企画する力も身についたと述べている。実際の子育て支援の現場を見学したことで（リアル）、子育て支援の実際や保育士としての関わりをイメージできるようにもなり、実感を伴う学びとなったと述べている。

以上、具体的な取り組み内容を3つに整理して報告した。どの取り組みも子育ての「リアリティ」を重視し、直接・間接的に親子に関わり、当事者の現状把握・親子理解等から子育て支援を考えることが出来るように計画されていることがわかった。また、それぞれの報告の結果から、教育効果も見られ、各取り組みは子育て支援に求められている「親子理解」や「コミュニケーション力」の向上に寄与することが報告されていた。一方で、「子育て支援力」の評価基準をもって実践を行っていた取り組みは1件に留まった。このことから、新カリキュラムになり、改めて現在、保育士に求められている「子育て支援力」とは何かを明確にし、授業等によってその力がどれだけ養成されているかを具体的に評価する視点を持つことが求められるのではないかと考える。

おわりに

筆者は、前任校で大学を拠点とした地域子育て支援に取り組んできた。大学内に地域の子育て支援を行う親子交流広場を開設し、学生は、様々な形で親子に関わる機会を得ていた。特に、授業「乳児保育Ⅱ」では「自主保育」（好きな時間に自由に交流広場に入って実習を行う）を家庭学習に位置付け、学生に推奨してきた。その結果、親子理解を深め、支援の基本姿勢としての傾聴や受容的態度の必要性を理解する等「子育て支援力」の向上が見られた。また、実践にあたっては、どのような力が必要なのか「子育て支援力」を明確にし、取り組みによる教育効果を明らかにするために、具体的な指標を用いる必要があること等を先行研究^{10) 11) 12)}で明らかにした。

現在、筆者は本学にて、前任校とは異なる教育環境のもと、新カリキュラムで新設された授業「子育て支援」を担当している。本学には伝統的に行われてきた子育て支援活動の「やんちゃキッズ」（ボランティア活動）の取り組みがあり、親子と関わる貴重な体験学習の機会となっている。その伝統を受け継ぎながら、2年間という限られた養成期間の中で、実践的かつ効果的に子育て支援を学び、養成段階で求められる「子育て支援力」をいかに身につけていくかということが課題になると考えている。

久松¹³⁾は、学生時代に勉強しておけばよかったこと、知っておけばよかったことで一番多かった項目が「保護者対応・支援」であり、「保護者とのコミュニケーション」「保護者の悩みについて、また解決法」「直接保護者に言われた時の対応」「保護者支援」があったと報告している。現行の保育所実習では、在園児の保護者や地域の子育て家庭とのかかわりは難しく、リアルな現実の中で子育ての当事者を理解したり子育て支援の支援方法等を学んだりする機会はほとんどなかったという学生は多いと推測される。

新カリキュラムにより、保育士の行う子育て支援が明確に打ち出された。「保育力」だけでは対応できない専門性が求められることを十分認識した上で、改めて「子育て支援力」の育成に取り組む必要性を感じている。今回の文献整理で見えた「リアリティを意識した演習の工夫」「授業と授業外活動の総合的な取り組み」や「養成期間を視野に入れた体系的な学習の仕組み」を参考にしつつ、2年間という限られた養成期間を見据えて、体系的かつ有機的に授業と授業外活動とを往還させながら、子育て支援力の養成について検討する必要があると考える。その際、保育者に求められている「子育て支援力」とは何かを明確にし、具体的な指標についても再検討し、養成課程に求められる「子育て支援力」の指標を用いて実践の検証を続けたいと考える。

今回は、新カリキュラム後の取り組みを調査し、筆者が担当する授業「子育て支援」や本学科における子育て支援力育成の取り組みについて一助を得ることを目的に、2019年度以降に公開された文献を対象に報告を行った。結果、重要な示唆を得たものの、調査した取り組みの中には、旧カリキュラムの授業内で行われているものや新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて本来の取り組みができていないもの等もあり、調査としては課題が残された。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省 (2007) 「保育所保育指針解説」 フレーベル館
- 2) 厚生労働省 (2018) 「保育所保育指針解説」 フレーベル館
- 3) 厚生労働省ホームページ「保育士等養成課程の見直しについて (検討の整理) 報告書」 (<https://www.mhlw.go.jp>) 2022.10.23最終閲覧日
- 4) 中山美佐, 山本一成, 宮城由美 (2020) 「保育者養成課程における子育て支援の実践力を育成する授業実践: リアリスティック・アプローチに基づくカリキュラムを通して」大阪樟蔭女子大学研究紀要 (10). pp.189-197.
- 5) 江莉川淳子 (2021) 「保護者支援のあり方を習得するための授業方法に関する一考察 (第1報) - 『保育相談支援』がよりよい学生への学びになるために -」東北女子短期大学紀要 (59). pp.60-71.
- 6) 中島啓子・工藤ゆかり (2019) 「江別市・札幌市の子育て支援の現状と保育者養成における子育て支援力の養成」北翔大学北方圏学術情報センター年報 11. pp.23-35.
- 7) 久保田健一郎・玉井久実代・野口知英代 (2021) 「保育者の専門性としての子育て支援に関する研究: 大学における子育て支援活動「わくわくランド」に関連して」国際研究論叢大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部紀要 34 (3). pp.69-87.
- 8) 瀬々倉玉奈 (2020) 「子ども・子育て支援に関する実践と研究を通じた学生の学び」京都女子大学教職支援センター研究紀要 (002). pp.75-83.
- 9) 菅野ひろみ・中島美那子・佐藤美年子 (2020) 「子育て支援による学生の学び: 深い学びを促進する現場での実践的研修」茨城キリスト教大学紀要. 2. 社会・自然科学 (54). pp.181-190.
- 10) 三好年江 (2016) 「保育者養成課程における子育て支援力の評価に関する研究 - 先行研究のレビュー -」新見公立大学紀要37. pp.99-106.
- 11) 三好年江 (2017) 「保育者養成課程における『子育て支援力』育成の取り組みの評価 (その2) - 子育て支援コンピテンシーを分析の枠組みにした記録の内容分析 -」. 新見公立大学紀要38 (1). pp.125-133.
- 12) 三好年 (2018) 「保育者養成課程における『子育て支援力』育成の取り組みの評価 - 子育て支援実習あり群となし群のプレポスト調査の分析を通して -」新見公立大学紀要39. pp.39-45.
- 13) 久松尚美 (2021) 「新任保育者における保護者対応の現状と課題」宮崎学園短期大学紀要 (13). pp.88-100.